

問い3 老いて亡くなることがわかっていても、受け入れられません。

連研中央講師・東京教区  
宮本 義宣

「老いて亡くなる」ことが決まっているわけではありません。年老いた順番に亡くなっていくわけでもありません。死は突然、わが身に訪れることになるかもしれませんし、愛しき人の身に突然起こることなのかもしれません。それは、誰もが分かっていることではあっても、容易に受け入れることができずに懸命に苦悩に立ち向かっているご門徒さんの姿から、私はさまざまなことを学ばせていただきました。そのようなことは、きっと皆さまもこれまで少なからず経験してきたことではないでしょうか。ご自身で振り返ってみることから、自らのいのちのありよう、私はどのように生きていきたいかを考えてみましょう。そして、本当に自らの死を受け入れていくということが、どういうことなのか考えてみたいと思います。

泣けないというつらさがある

東日本大震災で兄を亡くした妹さんが、震災から3ヶ月過ぎて行われた葬儀のあとにこのようなことを言われました。「兄が亡くなって数ヶ月が経っていますが涙が出てきません。涙が出てこないのです。思い切り泣けたらどんなに楽だろうか」と。

宮城県から離れて暮らしていたその妹さんは、2年ほど兄には会っていなかったそうです。突然の兄の死を知らされて、頭では津波で亡くなってしまったのだと理解していても、身が引き受けられていないのだと思うと言うのです。だから泣けない。泣けない辛さがあるのだということを、私はそのとき初めて知りました。

特に現代社会に生きている私たちは、いつも合理的にもの事を考え、行動していると自分自身では思っています。私もそうです。しかし、おそらく合理的に考えていることの外側には、合理的には考えていないことを持ち抱えながら私たちは生きているのかもしれないかもしれません。私たちは、しばしば、合理的に考えているものと合理的には考えていないものとの橋渡しをしながら生きているのではないのでしょうか。頭で理解できることと、理解できずに受け入れることができないことを橋渡しするものが私たちには必要なのだと思っています。

私にとって、それは何なのでしょう。

話しかけることができることは支えになりますか

連れ合いの方の三回忌法要を勤められたあとのお斎の席でのことでした。そ

のご門徒さんからこんな質問を受けたことがありました。

その方は、連れ合いの方と2人で暮らしていましたが、連れ合いの方を亡くされ、今、家でひとりぼっちで暮らしているというのです。これまではそんなことはなかったのですが、連れ合いを亡くされたあと、お仏壇に向かって、昨日あったこと、今日あったこと、うれしかったこともつらく悲しいことも、ときには愚痴や不満もお仏壇に向かって話しかけるようになったというのです。「それはいけませんか」というのが質問でした。

「おうちのなかで、何でも話しかけられる場所があつてよかったですね」と、私は答えたように記憶しています。今までは、家のなかで話しかける相手がいたのに、連れ合いを亡くされたあと家のなかでひとりぼっちになってしまった寂しさを吐露されたのでした。

私たちは「いつも一緒に」「いつも一緒にいるからね」と言うけれど、縁によってはひとりぼっちになってしまうことがあるのですね。一緒にいたいけれど一緒にいられない、親子であっても、夫婦であっても、親しき仲であっても、ひとりぼっちになってしまう残酷なことがわが身にも起こりえるのです。

そんなとき、私は何をたよりに生きていきますか。何をよりどころに生きていったらいいのでしょうか。

自らの死のあと、どうなっていくのかが想像できること

医療関係者のシンポジウムを聞く機会がお寺でありました。緩和ケア病棟の担当医の先生が、このようなことを言われました。これまで緩和ケア病棟に入院させている患者のかたがたと接し見てきたが、自らの死を受け入れていく方もいれば受け入れずにもがき続ける患者の方もおられるというのです。その違いはどのようなことが要因となってくるのか、これまでずっと自問し続けてきたそうです。もし、自分がその立場に置かれたとき、自分はどうかとも。

自らの死を考えたとき、こう思ったそうです。もし、自分が死んだら、祖父母が亡くなったときと同じように、家族がお寺の住職さん呼んで葬儀をしてくれるだろう。そして、自分の遺骨も祖父母の遺骨を収めたお墓に納骨されることだろう、と容易に想像できるというのです。今まで家族がそうしてきたことに自分は違和感もないし、大きな流れに身を任す、それでいいと思っていると語っていました。

そのお医者さんは、このことと緩和ケア病棟の患者のかたがたの姿を直接結びつけることはしませんでした。その先生は何を言いたかったのでしょうか。何を言いたかったと思いますか。

問い3 老いて亡くなることがわかっていても、受け入れられません。

連研中央講師・大阪教区  
加藤 真悟

13年前、2歳の子どもさんと、今生の別れをされたお父さんがいました。私は通夜と葬儀、中陰と法事を一緒に勤めさせていただき、その間、いろんな思いを、そのお父さんの口から聞かせていただきました。

満中陰の時でした。お勤めと法話が終わり、お出しくくださったお茶を頂戴しておりますと「住職に話しても仕方のないことなのですが…」と前置きされながら、そのまま話を続けてくださいました。「通夜と葬儀、子どものために、たくさんの方がお参りくださいました。ありがたいことでした。しかし、多くの方が『まだ小さいのに…』、『これからなのに…』と、私のことを案じてくださり、励ましてくださろうとしているのは分かっているのですが、言われるたびに何か引っかかってしまっていました。何だか子どもの人生が無駄な人生だったように言われている気がして…いや、人のことは言えない。私も同じように言ってきたんです。幼い子が、若い人が亡くなったときは、そう思い、そう言ってきたんです」。

さらに続けて「子どもはたくさんのお父さんの思い出を残してくれましたよ。皆さんからすれば、確かに短い時間、少ない思い出かもしれませんが、でも、大事な思い出なんです」。少し興奮気味に、大きくなりそうな声と涙を抑えながら語られました。

人は、自身が思いがけない厳しい縁に出会ったとき、さまざまな混乱のなかで、その現実と向き合います。それと同時に、非常に脆い心持ちのなかで過ごすのが故に、他から向けられる言葉に、とても敏感に反応します。

「話しても仕方のないこと」とおっしゃられながらも、このお父さんは、それでも私に話してくださいました。胸の中でつかえていたものが、しばらくの間、よほど苦しく、くやしかったのでしょう。また、誰にもその胸の内を語るができなかったようです。

何気に口にする、あるいは、自分では相手を思いはかった言葉を口にしていくつもりが、相手の大事なものを傷つけていたりすることが、私たちの日常にはあふれているのかもしれませんが。皆さんはどうお考えになりますでしょうか。

このお父さんは、さらにこのように続けられました。「通夜の時でした。小さな棺の中に入った子どもが、私に言うんです。『私がお父さんの子どもに生まれてきたことは、すごいことなんだ。当たり前ではないんだよ』と」。今度はご自身に説くように続けられます。「私が子どもと出遇えたことは、

子どもが生まれてきてくれたことは、当たり前のことではなかったんですね。本当は大変なことなんですね。私自身が生まれてきたことも、本当は大変なことなんですよ。私はそんなことを、今まで考えたことがありませんでした」。そして涙を流しながら「私は 36 才ですが、まだまだ人生の半分も来ていない、折り返しもしていない。そう思っていました。しかし、棺の中の子どもは『お父さん、36 年って、すごい時間を生きてきたよね』と言うのです。私は、自分が 36 年生きてきたことに、何の不思議も感じたことはありませんでした。これもまったく当たり前だと思っていたのです。子どもが教えてくれているように思えるのです」。

幼子との別れのなかで、このお父さんは、深くご自身のことを見つめられ、今、大切なことに出遇っておられるんだなあ…と、私が教えられたことでありました。

身近に一緒に過ごしてこられた方との別れによって、周囲やこれまでの日常に置いて行かれるような悲嘆のなか、すべての方が、このお父さんのように味わわれるとは思いません。ある意味では、何が正解という訳でもないでしょう。

そして、もう一方で「出遇いによって育てられ、別れによって深められる」と、おっしゃってくださった方がるように、別れという縁にあって、初めて思っていたこともあるのではないのでしょうか。聞こえなかったことが聞こえ、気づけなかったことに気づくということがないように思えるのです。

なぜ「老い」を、なぜ「亡くなる」ということを、私は受け入れられないのか。今、問うてみてはいかがでしょう。「早くして人生を終えることは悲しい」、「短い人生は哀れなもの」、「死はまったく虚しいもの」という以外に、本当に答えはないのでしょうか。いや、かえってそこに大切なことが潜んでいるかもしれません。

このお父さんと、ある日 2 人でお酒を飲みながら、食事をした時のことでした。「私は阿弥陀さまでなかったら、やっぱりダメです。よく理屈は分からないんだけど、阿弥陀さまは、私のことも、子どものことも、みんな知っていてくださる。そして、南無阿弥陀仏…ですか。いつも、仏さまとなった子どもと遇えるのが嬉しいのです」。グイッとグラスのビールを飲み干して、フーッと息をつき、目に涙を浮かべながら、笑ってくださったお父さんの顔が、私はとても印象的でした。